

この街が好きだから

大須賀一雄 武蔵野スケッチ物語

no. 57

むらさき橋にて

見慣れた風景も、絵になるとちょっと違う趣が出てきます。

そんな武蔵野の風景を、大須賀一雄さんが春夏秋冬で切り取って描きます。



この作品は、御殿山二丁目のむらさき橋から、川下を見ながら描いたものである。この橋は、武蔵野市と三鷹市が共同で、平成十年に老朽化した橋を建て替えたもので、橋の脇には、古今和歌集からの一句、「紫のひともとゆへに武蔵野の草はみながら あはれとぞ見る」が刻まれており、このことから、武蔵野に紫草が茂っていたことがうかがえる。

紫色が布地の染料として登場したのは、紀元前千年ごろで、フェニキア人により紫色の色素をもつ巻貝プルプラ（パープルの語源）が発見されたことによる。この色素は、二千個の巻貝からわずか一グラムしか採れないため、非常に高価で、特別な富裕層の人々しか利用することができなかつたと聞く。日本でも紫色は高貴な色とされ、聖徳太子が制定した冠位十二階の最高位の色でもあり、現代でも紫綬褒章などにも紫が使われているのも理解できる。

（絵と文：大須賀一雄）

Profile

大須賀一雄
（おおくさかずお）

水彩画家。1937年群馬県出身。武蔵野市在住。画材は透明水彩。元JR東日本国際課勤務。JR東日本絵画クラブ初代事務局長。これまでJR東日本の駅の絵を1000点以上描き、新聞、雑誌、テレビなどでも紹介されている。著書は『あなたの街の駅物語』（日貿出版社）、『スケッチお手本帖』（素朴社）、『透明水彩の世界・ヨーロッパ』および『緑』（旅もようスケッチ会）ほか。現在、JR東日本の大人の休日倶楽部のカレンダーの絵を担当。海外スケッチ旅行歴も長く、これまで50カ国以上を訪れ、個展も30回を超える。